時の御心地は如何ようましましん、無念とも口惜しとも家郎かも思さいりしら、かゝるべしと孫てより覚悟と極めし御身なれとも
もないと思さゞりしか、新聞などの噂では、果敢なき一兵士の身なれとも、戦場の陣中を、
家を忘れ、身を忘れ、只深く味方の勝利を祈る
外孫念なき身とかしら聞ひとか、さかは
ちの孫深長のお文の通りあるせる、味方勝軍
と聞き笑うて涙かなるを天皇陛下萬歳と呼
たりひし時なれ、只勝軍を欣びしと思ひ
ゆより代る代る作事小屋に
もさはあらじ、国々の軍人ならで卒紀らず、
秀林は学者なり、学問と一身を献げ忠ひし御
身なり、生先長く世に立ち身の、今こゝを果
敢なき物数の学者の終るを入りぬ身なれ、看よ我
研究の功績みとる暁るを、
学者もかゝる言はせず
の中の沸きかゝり義しき同の中
ことも有りつゝを、我天職まれあらぬ戦場の、
名も知れぬ雑兵の出しこゝろ強さを中りて家

と治え行く御心根の中と恐傍り奉りては、迫らぬ
事とは知りながら、不覚の泪迫り来て成し
難めべき心地するを、天皇陛下の万歳をいひ
死と死と玉へれば、其他の行事も思を
じりし[redacted]やうに思ふも、同情なき世
の人の冷[redacted]の心[redacted]の推測りなり、連添ふ
日新を淺くとも思ひ合うとる夫婦中の我用で
えとらば、死而之を為の二字を浮びしらんを、
を仕事の用心度き事でもあらやうに、訪ひ来
る人の口々に、御名誉の事でございますと言
はれる時の嬉しさ、恨めしさ、それと搭
へる苦しさを時を疲る思あり、弱き女
の用意なさを、世間の口が恐ろしうて、
にはさやうでございますと、心なき空言い
うてバッを合せし不甲斐なさ、秀樹の手
為も而月なし、
さるても人の命の果敢なさは、行くが嗚へん
朝露の宵の[redacted]日新行つるとも
から物の礎へるようりへど、何に経き命な
ら人とも日新に沈ゆるものならば、沈ゆべき

時を詰えさらなり、もし締めやうも有るべき
[illegible]、これは日影をも待たで詰え失せ玉ひ
し人の、その恨みを半生の我身に残りて、りつ
霽しともなき紙胎の[illegible]男ひに、紙胎
の鏡のをりして、着りて、失せ玉ひしと云ふを
偽りなて、今は共岩らよりふと出来ぬをん
やうな思をれ、[illegible]と行く人の袖を[illegible]、
なつかしき御幸を[illegible]さんと呼をれしやうな[illegible]
えて、ハイと返事をせんと思ひて、宝珠と悟
る時の口惜しさ、今は紀念となりし其人の手
跡の小道具、書物なんど、わきて算筮を誠め
し衣類の詰ふくも用ゐ御れる時、人目なて
れば抱きつきて忘しさゆかしさの有りくけを
泣いて〳〵泣き書[illegible]さんとしさるを、母様
に見咎められ、私ら嫌しつゝひつれと、
気休めなどゐ脇ゆら[illegible]ゐあらず、秀さんの生
返らぬ限り、私も泣いて〳〵泣き死みま
すと、[illegible]理なき繰きも親ぜこそ、道のうみる果を一
所ゐ泣いて下されとれど、私ゐ同情
して下さるなら、行で再び嫁入りせよと勧め

らるゝぞのや、私が命を[illegible]の命、おふさの命を行ら命と捨ひし言は怨みないとて爭で及たゝるべしや、行らおふさで先[illegible]どもで、跡を殘しさ共人が二度の妻を迎へれとなら、草葉の蔭で怨まずゝ居られうや、厚せこと

私やおふさ[illegible]それを思へば、その而で再び他[illegible]へ嫁入されむ、えいけからをしき嫁入仕、語くさへ耳の汚ぞや、とはりへこの中し[illegible]後家婦の身の、況ら夫もふくて拔果てんこを本意なれ、まゝ況

りさいこと聞きさいこと沢山あれども共人は最早此世を在さぬゝ[illegible]かや、待也茂の家の吹、私ら注いて注きくづをれしを、おさとそゞッと引寄せて、私のお陸を押しながら、わど此處を行るぬらしらと戯れのやうにいひぬひしかば、まゝそこを行もないやうなれども、所をと拔除へて我胸のおさりへ家て、此處を絶うぬと申上けとれば、行ぶと訴り玉ひしを、おさといふ恐がと、ゞッと目と目を見合せて

あふさの

芝居とかりさる共刑那さを、いとしさよ秋西
あふと[redacted]にかりさるら、あふさら我さかり
さるう、あふさと私と一つさかり、妻も夫も
独の世も此世も、秋と別れもなくかりて、
別さを嘆つてゐるがもどかしく、羨しいも
お忘れて矢張さあふさのお勝さ咲ひはきさる
を、上から左みかいり[redacted]て、御歌と我歌迄
く寄せぬひをんな言うて羨しから死んどら
何とすると嘩声と寄せて嘩きをふる、何とし
ませう、私[redacted]を忘れ死さ死んてるひます

といふは吹物さ寄かられて、後を気も遠くかり
て寄さかりしを、今悔ひ出しても体ら倦け
らやうな、えゝく、秋夫はりうこさ在す、
[redacted]も一夜恋をかき抱
さて伊陳さ載せぬをずや、羨しき[illegible]の我歌
を粗く捲つる心地のやうみ
我頑さ[illegible]も心地、あしと[illegible]を一夜さ
せて芸ひまこい、えゝ
[redacted]、何とこんなさ[illegible]
[illegible]ヒそつてぞかり左ぬふぞや、も一

十ノ廿 松屋製

おなきはいろて心絶う

夜天よとせつこの御戸を締かせぬをずや、
よう、絶かせぬへ、絶かせ玉をぬ中を、やは
か絶しまるらせんや、おゆし私としとるが、
こりやあせとのお冒真ぢやもの、物の宝をぬ
も逆所や、まことのあるさを、あか、あそこ
る秀家作りて居るふを、ぞれ、私らいて探く
りますぞ、ちやちやと仰しやつても気う同
きませぬ、いゝえ同きませぬ、ちやつとから
抱きへて、あらとゝ、ちるこをようも引抱き
まとね、もう〳〵勘糸ようませぬ、あいと
とゝ、あれ〳〵糸性や、お逃げるとるぬ、逃
けやうとて、逃しませうや、あれ〳〵気ふい、
孫の上ふんぞかけ上つて、あれ気ふい、為ち
とらあふとぞ行あさうます、
してあけますぞ、
あれ気ふい秀ぬ、隆りて下され玉ぬや、
ぬおとかぬと郷しとれぞ来て、早く来て秀
紅気ようかしら